

## 絶対複数と絶対単数について

安井 稔  
Yasui Minoru

英語の名詞には単数形と複数形とがある。それ以外の形はない。が、すべての名詞に単数形と複数形とが備わっているわけではない。一般に可算名詞の場合であれば、対象が1個なら単数形、複数個なら複数形を取る。不可算名詞の場合であれば、数えられないものを表すのであるから、複数形の出番はなく、取れるのは単数形だけ、ということになる。

これで名詞の単数形・複数形に関することがらがすべて片づくなら問題はない。が、すべての出発点であると考えられる可算名詞・不可算名詞の区別に、はっきりしないところがある。

日本人学習者を悩ます不可算名詞の例としてよく挙げられるものに **advice, news, information, furniture** などがある。日本語ではみんな数えられるものである。「今年の10大ニュース」など、その典型的な例である。**mist, ocean, drizzle, log** などが可算名詞としても不可算名詞としても用いられるという点も我々外国人の理解を越えるところであるといつてよい。ここでは次の(1)に **lawn** の例を挙げておくことにしよう。

- (1) a. **There is a lawn in front of the house.**  
(その家の前には芝生がある。)
- b. **There is not much lawn in front of the house.**  
(その家の前にはあまり芝生がない。)
- c. **He sat on the lawn.** (彼はその芝生に座った。)

この場合、(1c) の **the lawn** の根底にあるのが可算名詞の **lawn** であるか、不可算名詞の **lawn** であるかは先行文脈 (**preceding context**) がないかぎり決定不可能である。

英語でも **a piece of** を冠すれば **a piece of good advice** (よい忠告) のように、数えることができるものとして扱われる。この場合、**a piece** を取り除いても **advice** の中身になんら変容を生じないという状況下においては、**a piece of advice** は **\*an advice** と等価になる。というような議論の筋立てにたいして、「それはへりくつというものでしょう」といわれるかもしれない。

でも、実質上、これと同じことは実際に生じている。レストランなどで用いられる **Two coffees, please.** (コーヒー2つお願い。)とか **Two teas, please.** (紅茶2つお願い。)などがそれである。**Two waters, please.** (おひや2つお願い。)は少し出遅れていたようであるが、今では普通に用いられるという。この傾向は英語以外の言語においても広まりつつあると聞いている。こういう変化の潮流がどこまで進むかということは、現実の問題となるとまず考えるだけむだ、ということになるろう。

可算名詞・不可算名詞の区別は、一定不変のものではない。条件は様々であるが、可算名詞には不可算用法があり、不可算名詞には可算用法がある。けれども不可算名詞が可算名詞化さ

れた場合、通例の可算名詞がもつ用法のすべてをもつに至るかという、そうとは限らない。通例の可算名詞には単数形と複数形とがあり、その複数形は数詞を取ることができる。が、不可算名詞の可算名詞化によって生じた可算名詞には、複数形があっても数詞とともに用いることはできないというものがある。次の(2)をみることにしよう。

(2) a. **I feel a kindness to her.**

(私は彼女に好意をいただいている。)

b. **I can never repay your many kindnesses.**

(あなたから頂いた数々のご親切、とてもお返しできるとは思われません。)

c. **\*Thank you for your three kindnesses during my stay at your home.**

一般的にいえば、**a kindness** は **an act of kindness** (親切な行為) を示す。**Thank you for your kindness.** (ご親切ありがとうございます) の **kindness** である。**your many kindnesses** (ご親切の数々) は「複数個の親切な行為」というより「いっぱい、たくさん」の一種の強意複数用法と考えるべきものであろう。(2b) は容認可能で (2c) は容認不可能という用法上のすみ分けが可能となっているのはこのためであると思われる。

なお、(2c) が容認不可能であるということの背後には、複数形というものが存在するために満たしていなければならない条件があると思われる。それは複数形を形成している成員の間には一定の類似性がなければならないというものである。**triangles** (三角形) という複数形を構成している成員はその材質や形状がどれだけ多様であっても「3本の直線によって囲ま

れている図形」という類似性を共有している。**books** の成員などの場合も同様である。が、**kindnesses** の場合、成員間の類似性は求むべくもないであろう。強意複数の **kindnesses** は存在しえても、数詞を伴った複数形 **\*three kindnesses** の非存在はこのように説明することができると思われる。**furniture** の場合も、その成員には **table, chair, sofa, bed** などが含まれ、**furniture A** と **furniture B** との間に複数形を許容するに至る共通性を求めることは不可能に近いと思われる。

似た例をもう1つ、次の(3)に挙げておくことにしよう。**education** の例である。

(3) a. **a good education** (良い教育)

b. **Education is important for most societies.**

(教育は大抵の社会で重要なものである。)

c. **Children from the same family with similar educations time and again pursue entirely different lives.**

(同じ家族の中で似たような教育を受けた子供でもまったく異なる人生を送ることがある。)

d. **Julius Caesar had one of the best educations a classical world could provide.**

(ジュリアス・シーザーは、古典世界が与える最高レベルの教育を受けていた。)

e. **Young graduates will rely on their business educations to help them change the world.**

(若い卒業生たちは世界を変えるためにビジネススクールで学んだことをよりどころにするだろう。)

この場合、**education** が可算名詞、不可算名詞として用いら

れることは明らかである。が、複数形は極めてまれである。(3c-e)の例はかなり広範にわたるコーパスからやっと見いだしたものである。

こういう角度からみてゆくと、その成員間に類似性のみられない複数形にぶつかる。単数形の意味をもたない複数形ということである。次の(4)をみることにしよう。

(4) A: Where's Pam? (パムはどこ?)

B: She's doing the dishes. (洗いものしてる所よ。)

この場合の **the dishes** はかなり特殊で、食事の際に用いられる食器類をすべて含む。皿、深皿はもとより、コーヒーカップ、マグ、スプーン、ナイフ、フォークなどすべてが含まれる。

日本語の「皿洗い」にも相似の用法がみられる。ただし「皿洗い」には「その仕事をする人」の意を表す用法もある。そうすると「洗いもの」がよりふさわしいかと思われる。が、「洗いもの」には「せんたくもの」が入ってくる。場面が台所と決まればこのあいまい性は消える。

ある複数形が、対応する単数形の意味とは全く異なる意味でのみ用いられる場合、その複数形は、通例、「絶対複数」(**plurale tantum**)の名で呼ばれる。典型的な例が **sands** とか **waters** である。いずれも「大きな広がり」という含みを持ち、**sands** には「砂浜」とか「砂漠」の意味で用いられ、**waters** は特に領海 (**territorial waters**) の意でよく用いられる。ただ、注意すべきは、これらの場合、単数形と複数形とで意味が異なるとはいっても、2つの意味は、それぞれどこかで糸が繋がっているという点である。「砂浜」は「砂」でできており、「領

海」は「水」でできているからである。

ところがコンピュータの付属品である **mouse** (マウス) となると事情は一変する。コンピュータの場合、**mouse** の複数形は何であるというべきであろうか。昔から **mouse** の複数形は **mice** と決まっている。すなわち、**mice** といえはせわしなく動き回る小動物を指すことに決まっていた。つまり、**mouse** の複数形 **mice** は、動き回る小動物 **mouse** によって、いわば、先取りされていたのである。

そういうところへ、突然あとからコンピュータの **mouse** が現れた。コンピュータの **mouse** は複数形になっても、当然、動き回ることはしない。その動き回ることをしないコンピュータのマウスが複数形を必要とすることになったとしてみよう。

昔から **mouse** の複数形は **mice** と決まっている。コンピュータのマウスも **mouse** である以上、その複数形は **mice** しかない。そこでコンピュータの **mouse** は、いわば、おそろおそろ、**mice** の前にまかりでて、「今度複数形を必要とするはめとなりました。ぜひとも **mice** さんの末席に連ならせさせていただきたい」と願いでたとする。仮にこの申し出が受理されたとしてみよう。

その結果が「めでたし、めでたし」ならよいが、実はマウスに不満が残るのである。**mice** のほうにしてみれば「うちは動く **mouse** でいっぱいです。動かない **mouse** なんかを受け入れるスペースなどありません」という気持ちがある。コンピュータの **mouse** にしてみれば「ただ騒がしく動き回るだけの小動物と一緒にされてたまるか。単語にだって品格というものがある」という気持ちがある。

こういうジレンマに無縁の人々は幸いである。コンピュータ

にかかわりがあるろうと、なかろうと、「**mouse** の複数形は **mice** である」で幕となる（そしてコンピュータの **mouse** の複数形は **mice** であるという日がこないとも限らない）。他方、動かない **mouse** の進むべき道は1つしかない。**mice** を捨てることである。**mice** を捨てるということは新しいコンピュータ **mouse** 専用の複数形 **mouses** の誕生を意味する。

この結果はやや劇的であるといつてよい。まず、**mouses** は新語である。その単数形 **mouse** には「ネズミ」の意はない。動く **mouse** と動かない **mouse** とは、同じ語の多義性 (**polysemy**) を示すものではなく、同音異義語 (**homophone**) であると考えべきである。つまり、動かない **mouse** は、動く **mouse** と形が似ていたためにその名称を与えられたものである、その段階では、もともとあった **mouse** に新しい意味が1つ加えられたにすぎなかった。けれども新しい複数形 **mouses** が誕生した瞬間、その単数形 **mouse** は「コンピュータのマウス」の意味に特化され、その意味だけを表して、それ以外の意味は表さない語として、生まれ変わったのである。このように、ある特定の意味に特化され、他の意味を表すことはない単数形が新たに誕生したとき、その単数形を絶対単数 (**absolute singular**) と呼ぶことにしてもよいのではないか。

ほかに類例が全くないというわけでもない。「山のふもとに」は **at the foot of the mountain** である。山が2つあって「これらの山のふもとに」といいたいときは、どうなるか。**at the feet of the mountains** とすれば文法的には正しい。が、どこかおかしい。しっくりしない。山の下の方からよつきり足が伸びている感じがしないでもない。これはどうしたわけであろうか。

上で繰り返し述べてきたところからも察せられるように、「ふもと」は、**foot** と結びついているが、**feet** とは結びついていない。「ふもと」は **foot** のほうに特化されているのである。「ふもと」の意味の **foot** は絶対単数であるとしてよい。**feet** の中に「ふもと」の意味を収納する余地はないのである。「これらの山のふもとで」の意味を **at the foots of these mountains** という形で表そうとする人がいたら、むしろ、その勇氣と深慮とをたたえてもよいのではないか。

以上述べてきたことを総合的に考えると、共通点が1つあることに気づく。それは **mouse—mice**, **foot—feet** と並べてみれば明らかなように、いずれも不規則複数形が絡んでいるという点である。不規則複数形はどうして絶対単数と呼んでもよい現象と深くかかわっているのであろうか。これは上でも触れてきたように、不規則複数形に本来、対応していた単数形名詞 (**mice** の場合なら **mouse**) が、様々な事情から新しい意味 (**mouse** の場合ならコンピュータの付属品) を獲得するに至った場合、この新しい意味はもともとあった不規則複数形のもっている意味に繰り込もうとしてもかなり大きな抵抗に出会うということであろう。不規則複数形が本来的にもっている意味の壁はそれだけ厚いということである。長い歴史の威光をかさに着て新参者にはつれないといったところか。

上で触れた2例はいずれも単一語の場合であるが、複合語の場合にはまた別の問題が絡んでくる。複合語を構成している要素のうち、どちらか1つ（通例は末尾要素）が明確な中心語 (**head**) である場合、問題はほとんどない。例えば **freshman** (高校1年生、大学1年生), **workman** (作業員), **snowman** (雪だるま) の複数形は **freshmen**, **workmen**, **snowmen** でよい(た

だし **freshman** は、**24 freshman** のように単数複数を同じ形で用いる話者もいるようである。

けれども問題の複合語が商標名化されるに至っていると事情は変わってくる。商標名化されていない **superwoman** (超人的な女性) の複数形は **superwomen** でよいが、商標名化されている **Superman** (スーパーマン) の複数形はどうなるであろうか。普通名詞としての **superman** の複数形は **supermen** で問題ない。が、商標名化された **Superman** の複数形を **Supermen** とすることにはやや抵抗がある。その成立過程からみれば **Superman** は「**super + man**」であり、中心語は **man** である。が、ひとたび商標名化されるとその瞬間に固有名詞化されるといってよい。固有名詞に内部構造がないということはないが、それはその固有名詞の形成過程に立ち入ろうとしたとき問題となることで、固有名詞化された語自体の問題ではない。**Superman** という語は内部構造を問題とされることのない単一語であることになる。その語の内部に屈折変化などの介入を許さない存在であるということである。となれば、その複数形は(複数形が必要となる場面は、通例、ないと思われるが) **Supermans** とならざるをえないことになる。

相似の例として **Mickey Mouse** を挙げるができる。この語の複数形としては不規則複数形の **Mickey Mice** と規則複数形の **Mickey Mouses** の2つが考えられる。この場合、**Mickey Mouses** という形に賛成という立場を取る人々の間には **Mickey Mouse** が登録商標化され、固有名詞化された瞬間、その内部に屈折変化などを許さない独立の単一形として存在するに至っているという感じがあるものと思われる。**Mickey Mice** は形の上では確かに **Mickey Mouse** の複数形であるが、もはや

「ミッキーマウス」ではなくなっているということである。

最もやっかいものとして残るのが **Walkman** (ウォークマン) である。結論的にいえば、その複数形は **Walkmans** であるとしてよい。手元の英和辞典などには **Walkmans**, **Walkmen** の両方が挙げられているが、『コウビルド英英辞典』などには **Walkmans** が挙げられているのである。

そもそも **Walkman** という語を英語の単語として認めることができるか、ということからして問題である。この形はせいぜいのところ「えせ英語」(**pseudo-English**) であって英語ではない。つまり和製英語である。まず「動詞+人間名詞」という結合形は英語にはないはずである。さらに **Walkman** という語には中心語がない。**Walkman** は「人間の一種」ではないからである。複数形だから、その **-man** の部分を **-men** に変えるべきであるか、という議論がだんだんばからしくなってくるのである。もちろん、登録商標名としては何の問題もない。商標名の複数形というなら、単数形の商標名に **-s** を付けさえすればよい、というだけでの話である。

以上、**mouse**, **foot**, **man** などの複数形が思いもかけず抱えている問題に触れてきた。が、誤解を避けるため付言しておきたいのは、ここではこれらを正用法の問題として論じようとしているのではないという点である。これらの問題を論ずる際、心得ているべきであると思われる点を略述しようとしたにすぎないものである。

(東北大学名誉教授)